

Bulletin of  
Shimane  
Art Museum  
第7号

島根県立美術館  
研究紀要

2026



島根県立美術館研究紀要

第7号

目次

---

落合朗風研究(二)  
《落合常一翁絵巻》に見る落合家の交流関係…………… 4  
五味俊晶



## 落合朗風研究(二) 《落合常一翁絵巻》に見る落合家の交流関係

五味俊晶

はじめに

落合朗風(1896～1937)は、大正から昭和にかけて活躍した日本画家。日本美術院、帝国美術院、青龍社と様々な団体を渡り歩き、最終的には自らの手で明朗美術連盟を設立した。

連盟の活動が軌道に乗り始めた最中に亡くなったため、これまで落合朗風や明朗美術連盟については体系的に検証されてこなかった。特に若き日の朗風については、明らかに不十分な点が多い。

本稿において取り上げる《落合常一翁絵巻》(当館蔵)は、父親である落合常一(1856～1926)の生涯について朗風自身がまとめた卷子装の作品。作品の性質上、父親にまつわる事柄が中心となっているものの、随所に朗風自身の記憶や体験が織り込まれている。落合家の交友関係や大正時代の朗風の動向についても把握することができ、落合朗風研究にとって貴重な一次資料となっている。

これまでも本作は、朗風に関する展覧会において展示され、その価値を示してきた。大岡信「不思議な画家落合朗風」はその成果のひとつであり、本作の内容を用いたうえで朗風の出生について記している。ただ、横に長い絵巻という形態や癖のある朗風の字体が障害とな

り、本作に含まれる情報を精査できるほどの作品画像や釈文は発表されてこなかった。

令和5(2023)年に発表した「落合朗風研究」の続編として位置づける本稿は、《落合常一翁絵巻》の翻刻および註釈を主たる目的としながらも、その内容をもとに落合家の家族関係や宗教的背景を検討するものである。

### 一. 本作の概要

本作は一卷の卷子本であり、箱書より《落合常一翁絵巻》と呼称されている。共箱の記載は以下の通り。

蓋表・落合常一翁絵巻

蓋裏・昭和二年秋

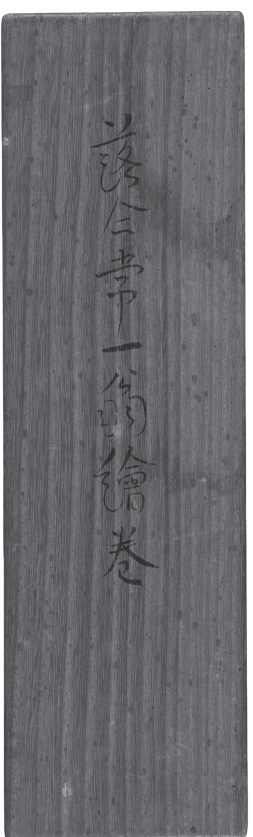
故父常一翁一週年忌に

朗風自題

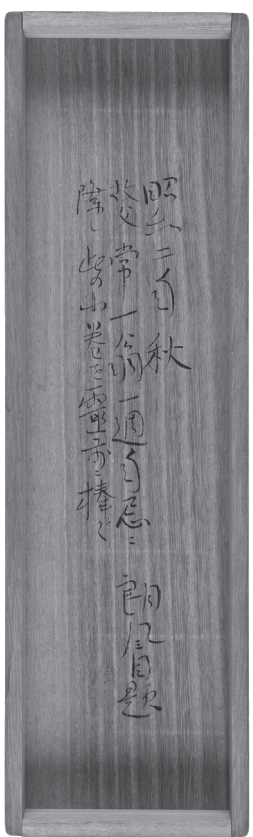
際し此の小巻を靈前に捧ぐ

朗風(朱文長方印)

共箱(蓋表面)



共箱(蓋裏面)



この記述より、大正15(1926)年11月18日に亡くなった、父親・常一の一周年に際して本作は制作されたことが分かる。

巻末の奥書では箱書と同様、父親の一周年に際して本作を制作したことが説明され、朗風とともに兄である落合忠三郎の名前が列記されている。ただ、あくまでも兄の名前は奉納者の一人として記されたものであり、本作の文字や絵を担当したのが朗風一人であることは、その筆致から間違いない。

表題として、巻頭の絹地に「故父常一翁絵巻」と記した題簽が貼られている。全体を見ていくと、本作は三つの部分から構成されていることが分かる。まず、落合常一の肖像画を描いた一枚紙(24・

8×17.9cm)が貼られている。次に「略伝」という文字以降に本文が始まる。この部分が最も長尺の箇所であり、24.8×55.6.2cmを占めている。そして最後に、本作の制作経緯を記した一枚紙(24.8×17.9cm)が貼りつけられている。

これまで本作の寸法を記す際は25.0×68.3.0cmという表記が用いられてきた。ただこの数値は、前書、本文、奥書間の表装部分をも含めた全体の概寸であるため、正確とは言い難い。本稿では、前書が24.8×17.9cm、本文が24.8×55.6.2cm、奥書が24.8×17.9cmという寸法表記を用いていく。

ただ、最も長尺の本文部分に関しても、横に長い一枚紙を朗風が用いていた訳ではない。24.8×17.9cmの紙三十一枚分を、それぞれ間に合紙を入れつつ表装している。つまり、前書及び奥書と合わせると三十三枚分の一枚紙(24.8×17.9cm)を、朗風は当初スケッチ帳のように用いつつ描いていったと推察できる。父親との想い出を一定サイズの紙へ断片的に描き、それを一周年にあわせて表装したのである。

縦長の紙に日々の出来事をまるでエッセイのように綴っていく方法に、朗風は大正13(1924)年から挑戦している。転機となったのは、同年に記し始めた『絵日記』(当館蔵)。4月9日から8月7日までの日常を絵と文章で綴った一冊だが、島根県生まれの日本画家・勝部大逸(1889～1959)が当時つけていた絵日記に触発され書き始めたという。その軽妙な筆致は俳句に親しむことで更なる高みに達し、『若日の大国王命』(昭和7年、個人蔵)や『遊園帖』(昭和10、12年、当館蔵)といったユーモア溢れる作品へと昇華していった。

## 二. 本作の伝来について

本作には資料として三枚（一枚は白紙）の書面が付属している。朗風の妻である信子が落合健造に宛てた書簡であり、ポールペンで記されている。落合健造（1913～2001）は島根県簸川郡平田町（現出雲市平田町）に生まれ、山陰合同銀行において勤務する傍ら、草風という雅号で日本画を制作した。朗風と苗字は同じであるものの、縁戚関係にはない。ただ、平田町出身者という点で落合家とは接点があり、黎明という雅号を用いていた若い頃に朗風の主宰する明朗美術連盟研究会へ作品を送り、講評を受けていたことがある。付属書面の内容は以下の通り。

前文御免下さいませ

先日は御葉書うれしく

拝見いたしました。

此の度、島根より帰って

参りました。父の絵など

健造様に、さし上げます

子供の、なき私、なにか

貴方様に、さし上げたく、

思い居りました、ところ

です。

又なにか、其の内に御送り  
申上げます

皆々様に宜しく申上げて

下さいませ

御機嫌よう

信子

健造様

『落合朗風先生遺作目録』（個人蔵）によると、昭和12（1937）年に朗風が逝去した後、朗風作品は川口春波（1899～1972）を中心に整理が行われ、作品だけではなく下絵や写生帖も含め多数が落合家において管理されていた。昭和14（1939）年4月、東京府美術館において落合朗風遺作展が開催されたのにあわせて落合朗風遺作頒布会が行われ、若干の作品整理が行われたものの、作品の多くは落合家に残り続けた。その後、戦争の激化に伴い、妻の信子は東京から生家の千葉へ朗風の遺品とともに疎開した。その作品群のなかに本作も含まれていた可能性が高い。

この手紙は、子供のいなかった信子が健造へ自らの所蔵作品『落合常一翁絵巻』を贈与することを記したものであり、朗風没後も信子が島根を訪れていたことを示している。ただ残念ながら消印を捺した封筒が残っていないため、信子がいつ頃送付したものか明らかではない。

発送年月日を考えるうえで重要なのが、本作に付随している、昭和

44（1969）年5月19日付けで島根県立博物館（当館の前身）が発行

した出品感謝状と平成4（1992）年3月30日付けで平田市旧本陣記

念館（現平田本陣記念館）が発行した出品御礼状。「落合朗風遺作

展」、「落合朗風展」がそれぞれの館で開催された際に用意されたも

のである。両者の発行先の宛名を確認すると、昭和44年の感謝状では宛

先が落合信子であるのに対し、平成4年の御礼状では落合健造に交

わっている。つまり、所蔵先が信子から健造へと変更になったのは、昭

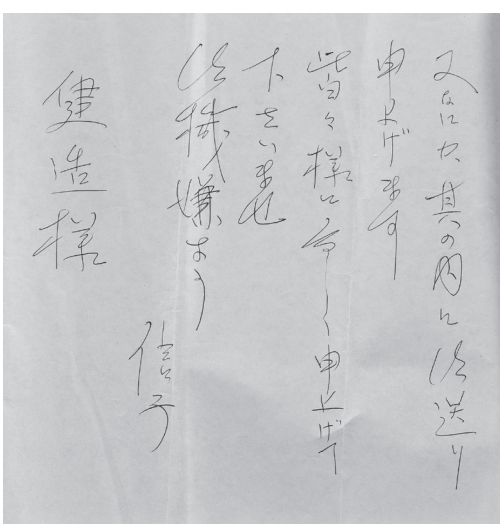
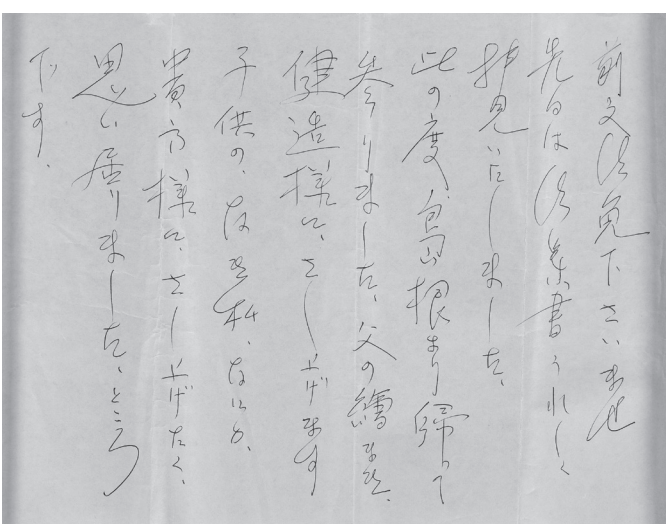
和44年より平成4年の間ということになる。

平成13（2001）年に健造が亡くなった後も作品は落合健造家で保

管されていたものの、作品保全の環境を心配した親族より申し出があ

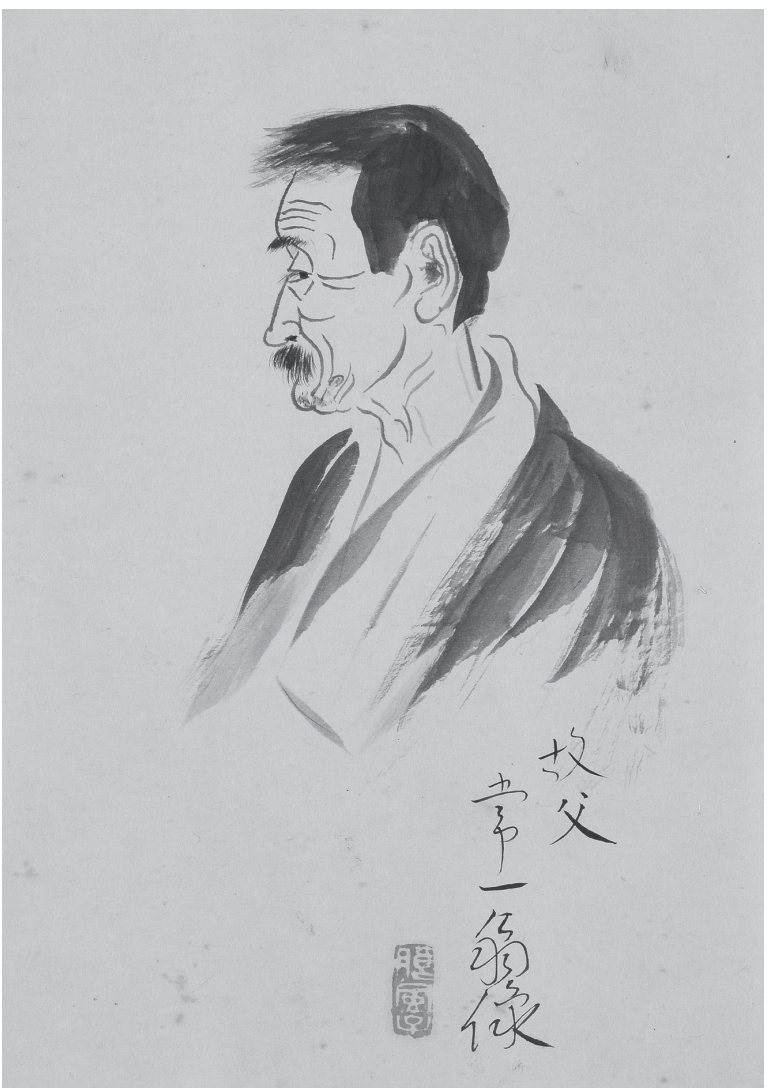
り、平成30（2018）年に当館が寄贈を受けた。

『落合健造宛落合信子書簡』



三、《落合常一翁絵巻》翻刻

- ・本章では、以下の凡例に従い《落合常一翁絵巻》（当館蔵）の翻刻を行う。
- ・名前や年号など特別な用途以外の旧字体及び片仮名表記は、それぞれ新字体と平仮名表記に改めた。
- ・句読点は原文に表記がある際のみ記し、新たに付与することはしなかった。
- ・【】で示した部分は註を付した箇所であり、その数字は四章註釈の項と一致している。



故父  
常一翁像【1】  
朗風子（白文長方印）

略伝  
故父常一翁は安政三年五月拾七日島根県  
簸川郡平田町宮の丁【2】に生る幼にして両親に死なれ  
叔父の家に養れた幼少より新進の氣に富み  
写真研究の目的にて松江に出で大阪に上り  
業種問屋に勤務す後上京して日本橋区  
浅沼写真真店【3】に勤務（二十歳頃）せしが其後  
種々都合あり知人の勧めに依り煙草家を営み  
神田神保町（現今の／中井銀行）【4】に開店す此の時母きく【5】と  
結婚す家業繁榮し全盛の觀ありしも

略伝

故父常一翁は安政三年五月拾七日島根県  
簸川郡平田町宮の丁【2】に生る幼にして両親に死なれ  
叔父の家に養れた幼少より新進の氣に富み  
写真研究の目的にて松江に出で大阪に上り  
業種問屋に勤務す後上京して日本橋区  
浅沼写真真店【3】に勤務（二十歳頃）せしが其後  
種々都合あり知人の勧めに依り煙草家を営み  
神田神保町（現今の／中井銀行）【4】に開店す此の時母きく【5】と  
結婚す家業繁榮し全盛の觀ありしも

西王女子政府専売となり廢業す【6】再度  
帰国し又上京して諸種の家業に努力せしも  
時利あらず追々困難の立場となり加へて  
母きく不遇中に産後経過悪して三人の  
幼兒を残して永逝す【7】益々困窮相加里  
一時はか細き身をも厭わず人力車を引き  
辛くも育兒の為奮闘す  
其後知人の紹介にて西ヶ原獣疫調査所【8】に  
雇われ専ら育兒の為身を犠牲にす年  
五十余才【9】にて右所を退く後は基督教の  
信仰生活に入り生活上精神上に余裕も

出来

居を本郷区動阪町十六番地【10】に移す  
 其の後市川町に田端【11】にと居を移し悠々自適  
 神を信じ山河を跋し風光を愛で勝利の  
 裡に田端五四八番地に於て七拾一才【12】の高齡  
 を以て天国に召さる。時大正拾五年十一月十八日  
 午後十一時十分  
 病名食道狭窄症  
 廿日三田教会【13】に於て中川邦三郎牧師【14】司會の  
 もとに告別式を挙ふ、後市外落合火  
 葬場【15】に焼骨し島根県平田町本妙寺【16】  
 落合家墓地に母の遺骨と共に埋葬す

分骨して青山墓地【17】に母の遺骨と合せ  
 落合家墓地に埋む。

大正十五年十一月十七日  
 京都から漸々引越【20】して  
 来た。大層早かったね  
 くと父は病床に  
 ありながら嬉びて迎へて  
 呉れた。あまり身体の  
 調子がよくなさそうで  
 あつたがそれでも色々  
 話をされ嬉んで居られた  
 これでその明日死ぬとは  
 とても思へは  
 しなかつた  
 に……

故父の筆蹟

東京府瀧の川町字  
 田端町五四八【19】  
 落合家常市

故父筆蹟【18】

東京府瀧の川町字  
 田端町五四八【19】  
 落合家常市

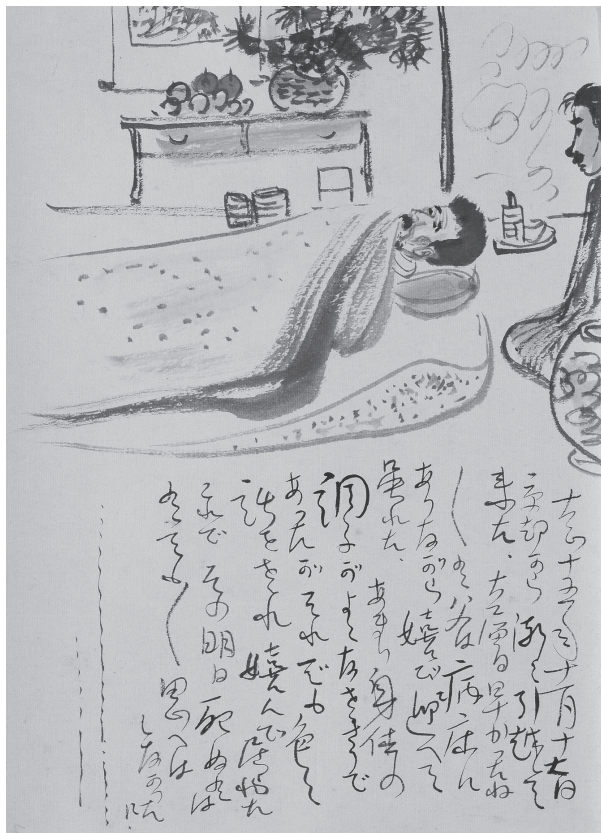
大正十五年十一月十七日

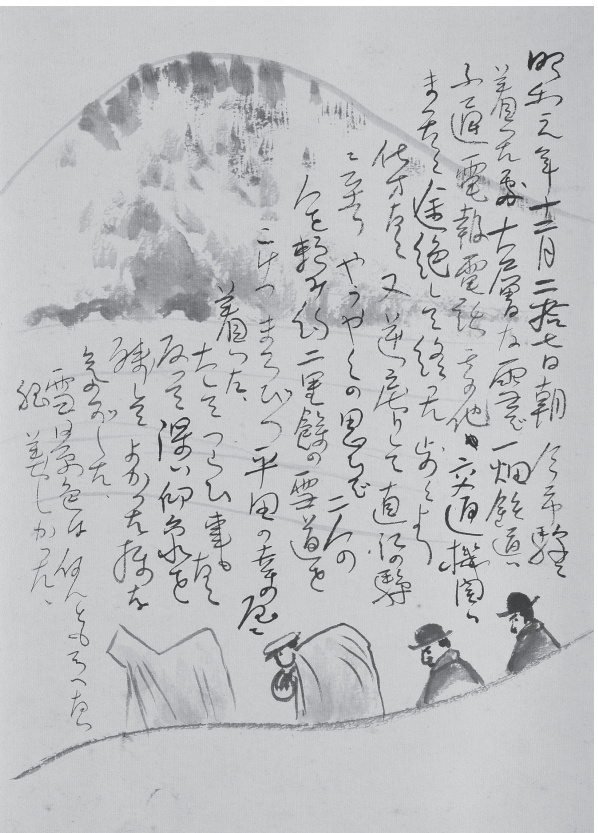
京都から漸々引越【20】して  
来た。大層早かったね

くと父は病床に  
 ありながら嬉びて迎へて  
 呉れた。あまり身体の  
 調子がよくなさそうで  
 あつたがそれでも色々  
 話をされ嬉んで居られた  
 これでその明日死ぬとは  
 とても思へは

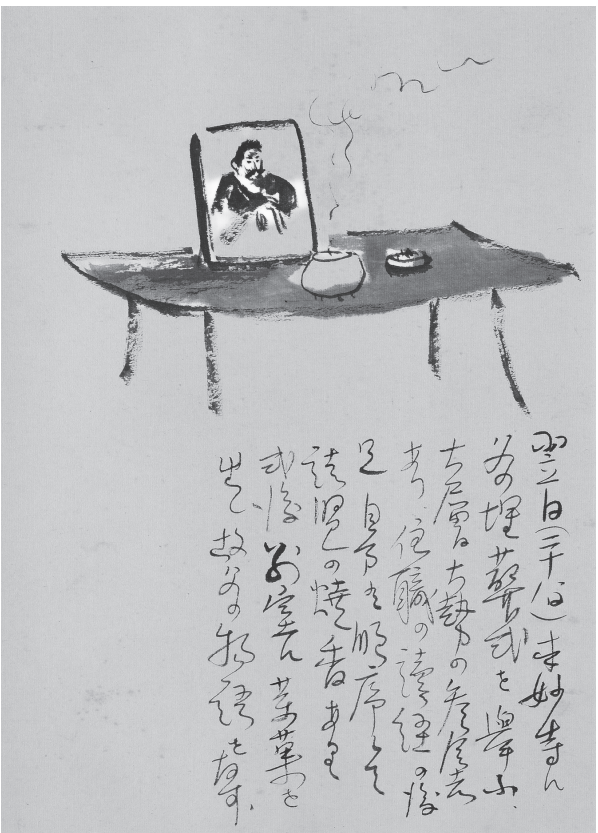
しなかつた

に……





昭和元年十二月二拾七日朝今市駅【21】に着いた処大層な雪で一畑鉄道【22】は不通電報電話その他交通機関はまったく途絶して終った。歩くより仕方なく又逆戻りして直江の駅【23】に至りやうやくの思ひで二人の人を頼み約二里余の雪道をこけつまろびつ平田の幸の屋【24】に着いた。大してつらひ事もなく反って深い印象を残してよかつた様な気がした。雪景色は何とも云へない程美しかった。



翌日(二十八日)本妙寺に父の埋葬式を奉ふ。大層大勢の参会者あり。住職の読経の後兄自分と順序して諸賢の焼香あり式後別室に茶菓を出し故父の物語をなす。



十故落合常市之墓【25】

大田博士 昔之人貞杖様より弔詞  
 落合さん、貴方は十一月十八日遂に人間世界を去られて  
 貴方の最も信仰してゐられたエース様の御側に召されまし  
 たはね。落合さん貴方はほんとうに貴い方でした。  
 そしてかくれた人格者でした  
 若くして奥さんに逝かれ三人の靉幼児は貴方の手に残  
 されました其の当時はどんなに苦しかった事でしょう肉にも  
 霊にも其の上人間界には何うしてもなくてならない  
 物質の苦しきも大したものでしたでしう。でも男性に  
 有勝な暴君にならなかつた事は私ほんとうに感  
 動して居りました。のみならず貴方は子供に対しても  
 ほんとうに寛大でした私はよく覚えて居ります  
 子供のなすがまゝに……今の新しい教育者に先だち、

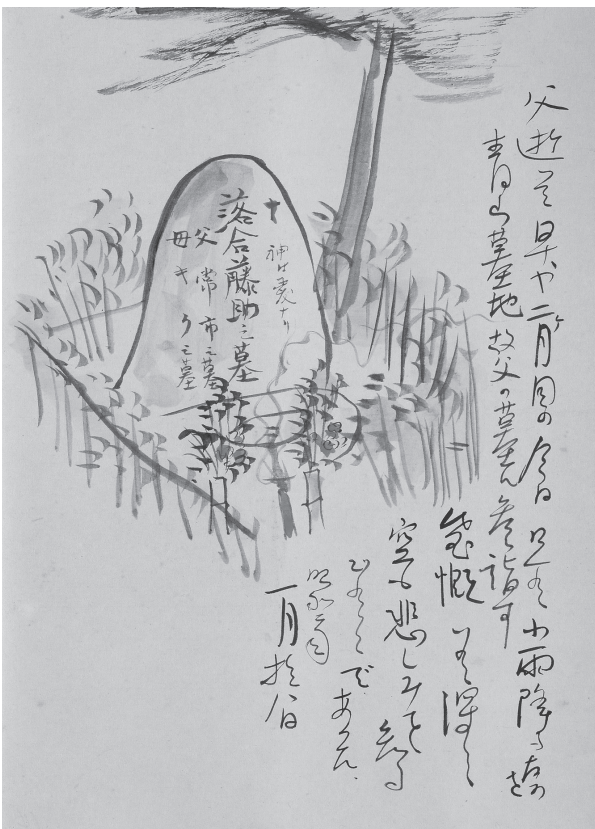
故大田博士【26】未亡人貞杖様よりの弔詞  
 落合さん、貴方は十一月十八日遂に人間世界を去られて  
 貴方の最も信仰してゐられたエース様の御側に召されまし  
 たはね。落合さん貴方はほんとうに貴い方でした。  
 そしてかくれた人格者でした  
 若くして奥さんに逝かれ三人の靉幼児は貴方の手に残  
 されました其の当時はどんなに苦しかった事でしょう肉にも  
 霊にも其の上人間界には何うしてもなくてならない  
 物質の苦しきも大したものでしたでしう。でも男性に  
 有勝な暴君にならなかつた事は私ほんとうに感  
 動して居りました。のみならず貴方は子供に対しても  
 ほんとうに寛大でした私はよく覚えて居ります  
 子供のなすがまゝに……今の新しい教育者に先だち、

是より内の子供を大自然に向つて遊びさして  
 行かれし今日落風さんのあるのは貴方のかくれ  
 九力がどれ丈御座いまするやら  
 其の一昨年の秋三越の階上で落(朗)風さんの展  
 覧会〔乙〕が御座いました時昔を忍んでまるで夢の  
 やうで御座いました私共夫婦でさえ嬉しかった  
 のに貴方はどんなに御嬉しい事であろうと思ひました  
 落風さんが京都にゐられる事を聞きました時  
 一度は御目に掛つてほめて差し上げたかったですわ  
 之計りは私は惜しい事しました今は無き主人と  
 其夜の話題に私は平ちゃんが生れつき宜し  
 かったのだと申し主人は否落合の教育がよか  
 ったのだと申しました。

落合さん矢張貴方の方針がよろしかったのですわ  
 落合さん私は夫を失くして一人貴方を思ひ  
 起します毎日泣いて泣いて後いつもほっと  
 光明を見出します貴方の踏んで来られた道を  
 又私はふみしめて行けば必ず到着する事が  
 出来ると思ひます何うか昔御心安かった  
 御情に私に真直な道をふまして行かして  
 下さいませ

故  
落合様

貞枝



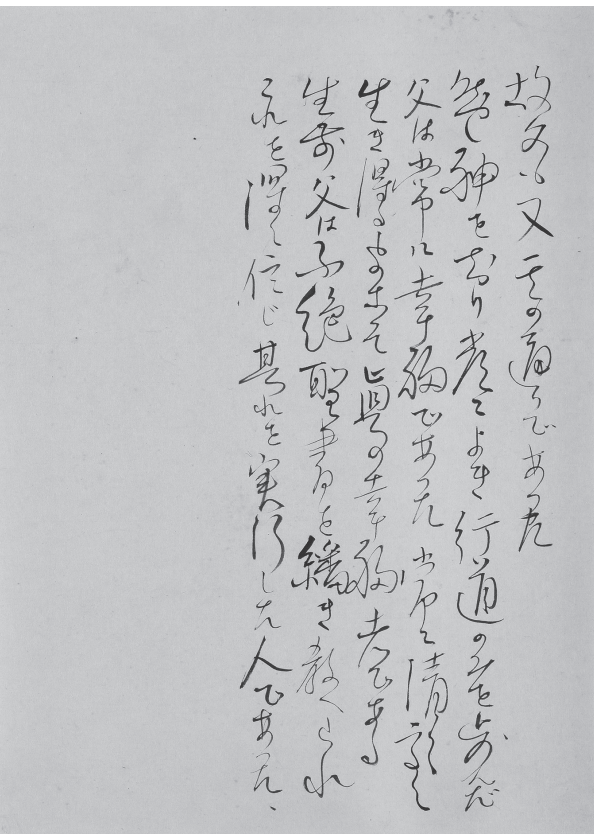
父逝つて早や二ヶ月目の今日兄と小雨降るなかを  
 青山墓地故父の墓に参詣す  
 感慨いと深く  
 空も悲しみを  
 ごとくであった。  
 昭和二年  
 一月拾八日

父は信仰篤き基督教の信者であつた  
 其の行動、言葉なりは皆基督の教より  
 出づるものであつた様である。一面我情の強かつたと思  
 はれる節もあつたこれはまったく吾人の強く  
 学ばねばならない所と信ずる  
 即ち信仰深く主義に高く生くる者は  
 世俗に媚び妥協を事とするを潔  
 よしとしない男らしき気概の所  
 有者である。吾人は相顧みて父に対し  
 殊に赫顔に堪へない斯の如き人格の所有者  
 こそ眞の勇者と云ふ可きである  
 それが為物質的にはまことに恵が薄い

十神は愛なり  
 落合藤助〔28〕之墓  
 父常市之墓  
 母キク之墓

父は信仰篤き基督教の信者であつた  
 その行動、言葉なりは皆基督の教より  
 出づるものであつた様である。一面我情の強かつたと思  
 はれる節もあつたこれはまったく吾人の強く  
 学ばねばならない所と信ずる  
 即ち信仰深く主義に高く生くる者は  
 世俗に媚び妥協を事とするを潔  
 よしとしない男らしき気概の所  
 有者である。吾人は相顧みて父に対し  
 殊に赫顔に堪へない斯の如き人格の所有者  
 こそ眞の勇者と云ふ可きである  
 それが為物質的にはまことに恵が薄い

故父も又その通りであった  
 然し神をかり常々よき行道のみを歩んだ  
 父は常に幸福であった常々清く高く  
 生き得るものこそ真の幸福者である  
 生前父は不絶聖書を繙き教へられ  
 これを深く信じ其れを実行した人であった。

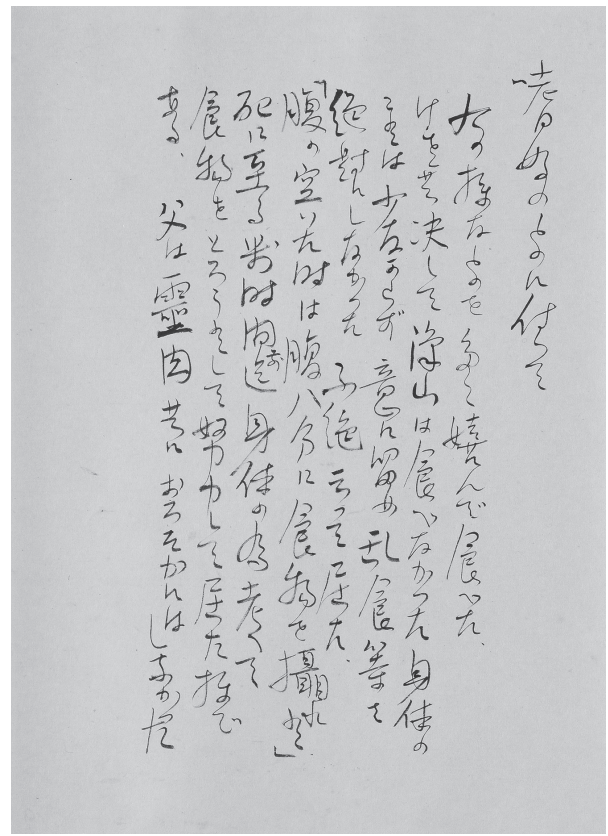


父生前嗜好のもの  
 大福  
 ドロップ  
 饅頭  
 りんご  
 牛乳  
 梅干  
 仁丹  
 鯛  
 すし



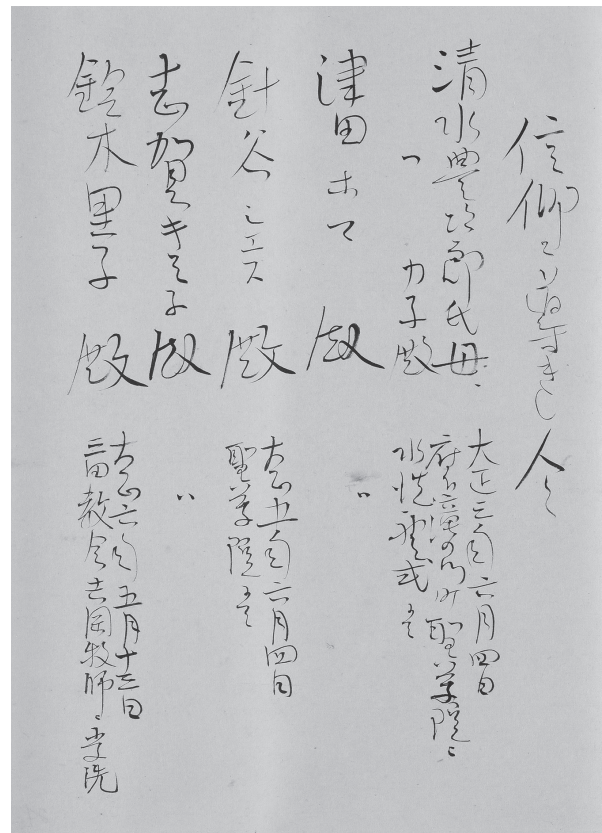
絵  
 めの葉  
 御茶  
 餅  
 さしみ  
 うなぎ  
 そば  
 花

嗜好のものについて  
 右の様なものを多く嬉んで食べた。  
 けれ共決して沢山は食べなかつた身体の  
 ことは少なからず意に留め乱食等は  
 絶対しなかつた不絶云って居た、  
 「腹の空いた時は腹八分に食物を摂れと」  
 死に至る数時間前迄身体の為考へて  
 食物をとろうとして努力して居た様で  
 ある。父は靈肉共におそろかにはしなかつた

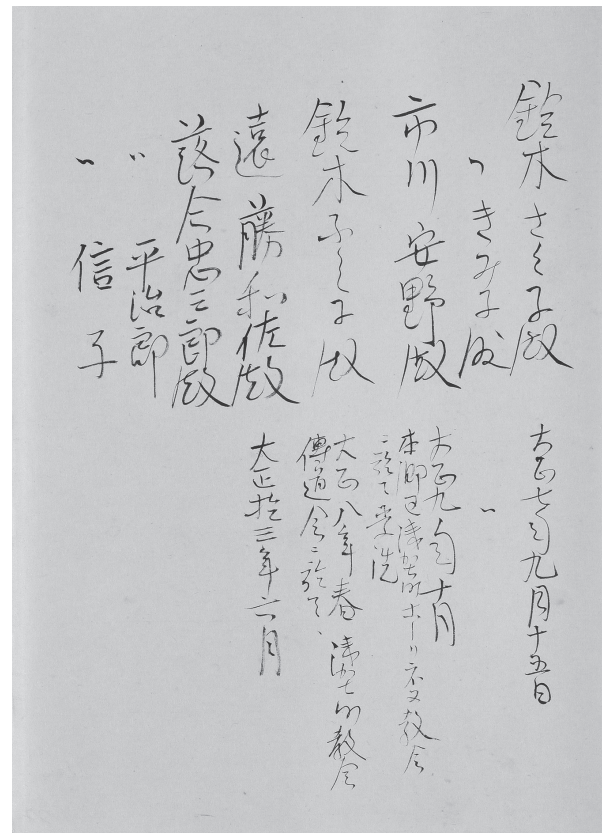




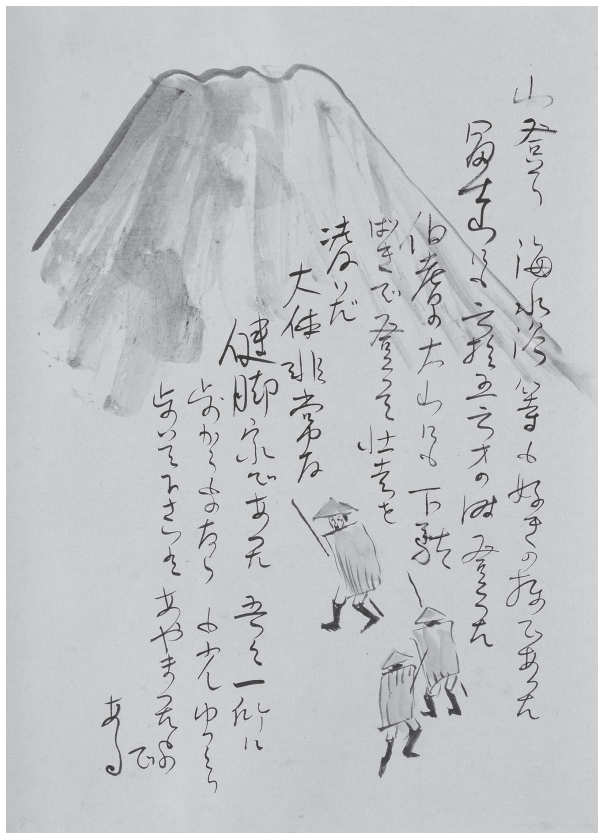
質朴な格好 態度 よき村夫子の  
感が あった。



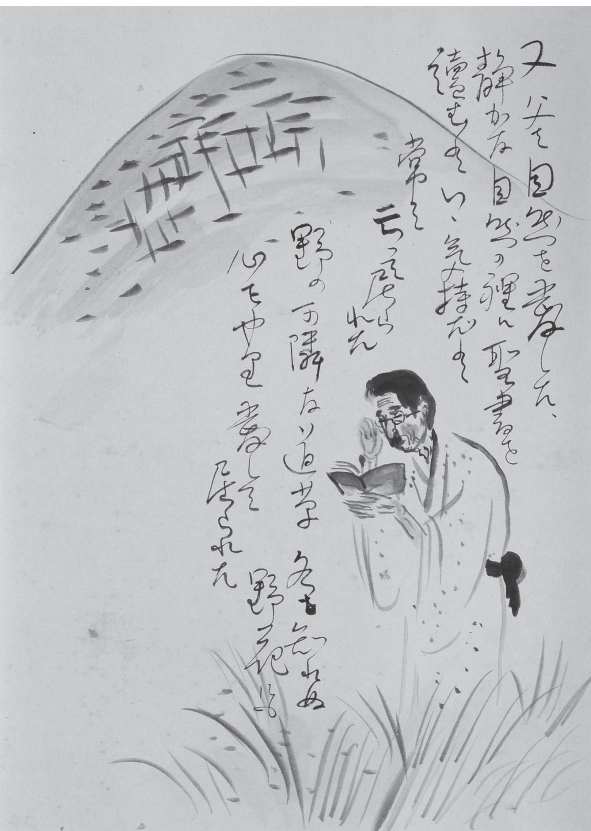
信仰に導きし人々  
清水豊次郎氏母 殿 大正三年六月四日  
府下滝の川町聖学院【29】に  
水洗礼式にて  
津田ホマ 殿 大正五年六月四日  
針谷シエス 殿 聖学院にて  
志賀キミ子 殿 大正六年五月十三日  
鈴木里子 殿 三田教会吉岡牧師【30】に受洗



鈴木さく子 殿 大正七年九月十五日  
市川安野 殿 大正九年十月  
本郷区浅賀町ホーリネス教会【31】  
に於て受洗  
鈴木ふみ子 殿 大正八年春 浅賀町の教会  
伝道会に於て  
遠藤和佐 殿 落合忠三郎 殿【32】  
平治郎 殿【33】  
信子



山登り 海水浴等も好きの格好であった  
富士山にも六拾五六才の時登った  
伯耆の大山にも下駄  
ばきで登って壯者を  
凌いだ  
大体非常な  
健脚家であった吾々一所に  
歩かうものなら も少しゆっくり  
歩いて下さいとあやまったもの  
である



又父は自然を愛した。  
静かな自然の裡に聖書を  
読むといふ、気持だと

常々

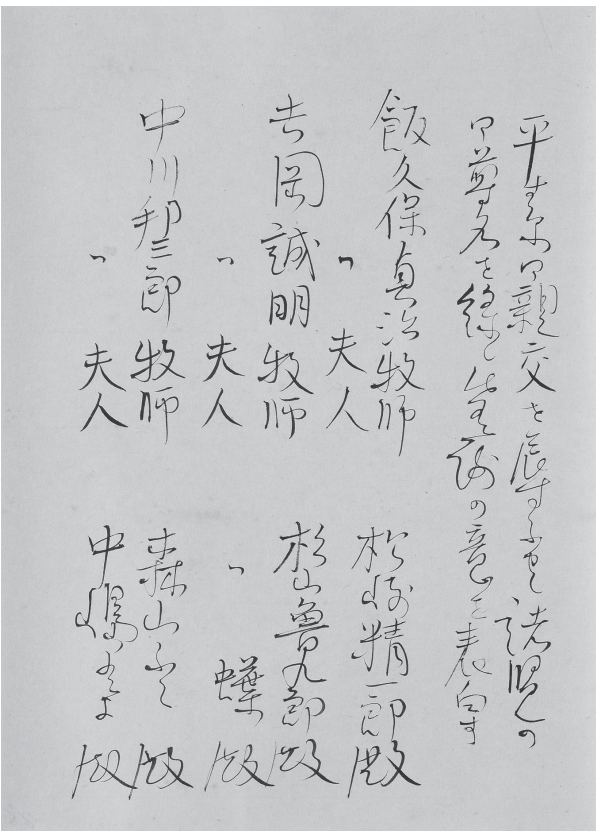
云って居ら

れた

野の可憐な道草名も知れぬ  
野花にも

心をやり愛して

居られた



平素御親交を辱ふせし諸賢の  
御尊名を録し感謝の意を表白す

飯久保貞治牧師

夫人

吉岡誠明牧師

夫人

中川邦三郎牧師

夫人

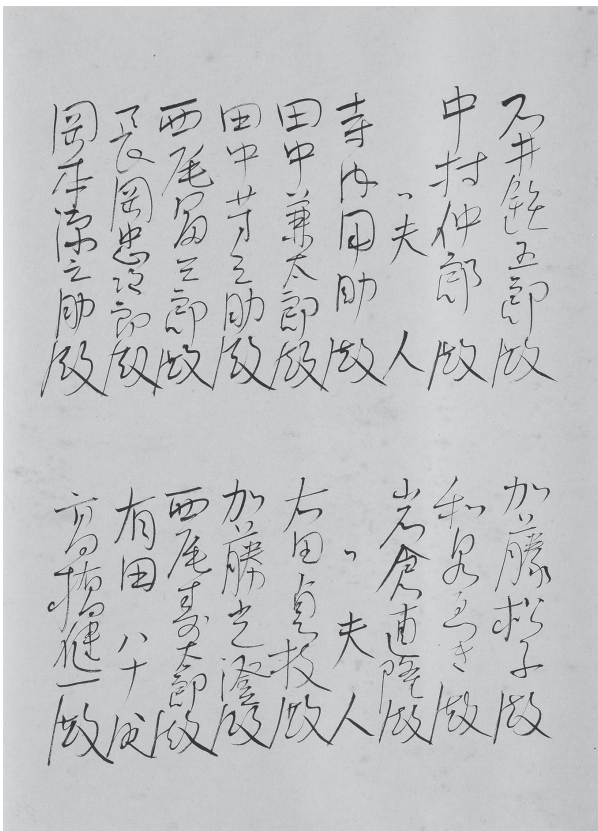
杉崎精一郎殿

夫人

中嶋とよ殿

夫人

平素御親交を辱ふせし諸賢の  
御尊名を録し感謝の意を表白す  
飯久保貞治牧師【34】 松崎精一郎殿【35】  
” 夫人  
吉岡誠明 牧師【36】 杉山魯九郎殿【37】  
” 夫人 ” 蝶殿  
中川邦三郎牧師【38】 森山ふく殿  
” 夫人 中嶋とよ殿【39】



石井鉄五郎殿

夫人

中村仲郎殿

夫人

寺内用助殿

夫人

田中兼太郎殿

夫人

田中芳之助殿

夫人

西尾富三郎殿

夫人

長岡忠次郎殿

夫人

岡本源之助殿

夫人

加藤松子殿

夫人

和泉なつき殿

夫人

岩倉直隆殿

夫人

右田貞枝殿

夫人

加藤光澄殿

夫人

西尾寿太郎殿

夫人

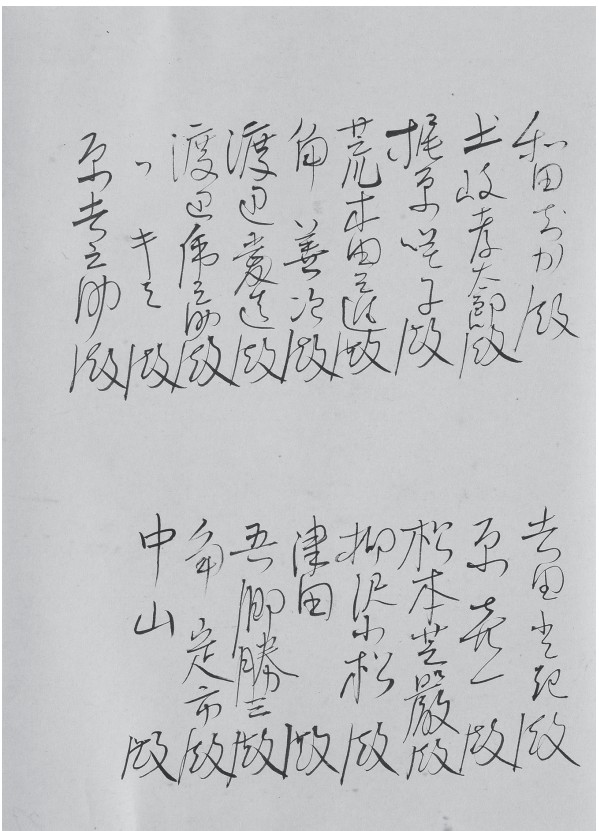
有田ハナ殿

夫人

高橋健一殿

夫人

石井鉄五郎殿【40】 加藤松子殿  
中村仲郎殿 和泉なつき殿  
” 夫人 岩倉直隆殿  
寺内用助殿【41】 ” 夫人  
田中兼太郎殿 右田貞枝殿  
田中芳之助殿 加藤光澄殿【42】  
西尾富三郎殿 西尾寿太郎殿【43】  
長岡忠次郎殿 有田ハナ殿  
岡本源之助殿 高橋健一殿



和田ちか殿

殿

土岐孝太郎殿

殿

梶原咲子殿

殿

荒木由之進殿

殿

角善次殿

殿

吉田とき殿

殿

原喜一殿

殿

松本芝巖殿

殿

柳沢小松殿

殿

津田殿

殿

和田ちか殿【44】

殿

土岐孝太郎殿【45】

殿

梶原咲子殿

殿

荒木由之進殿

殿

角善次殿

殿

吉田とき殿

殿

原喜一殿

殿

松本芝巖殿【46】

殿

柳沢小松殿【47】

殿

津田殿

殿

吉田とき殿

殿

原喜一殿

殿

松本芝巖殿【46】

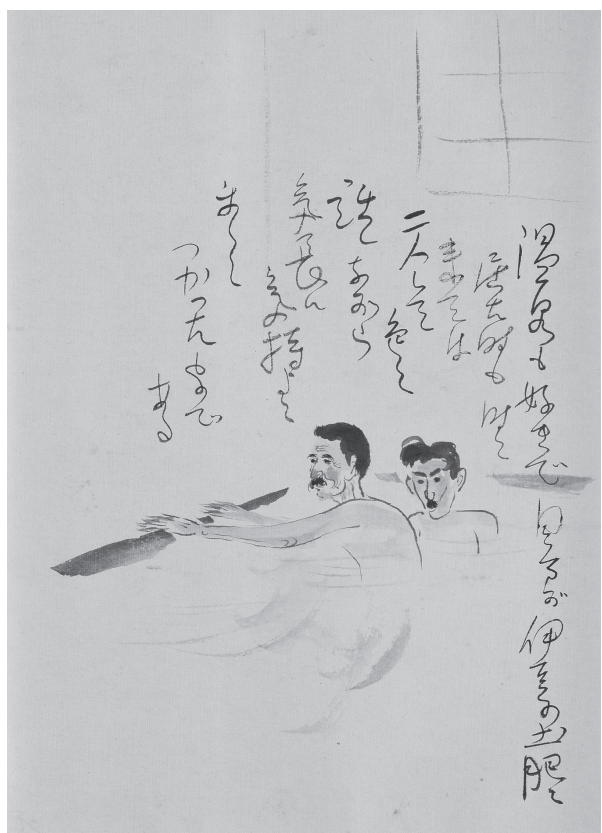
殿

柳沢小松殿【47】

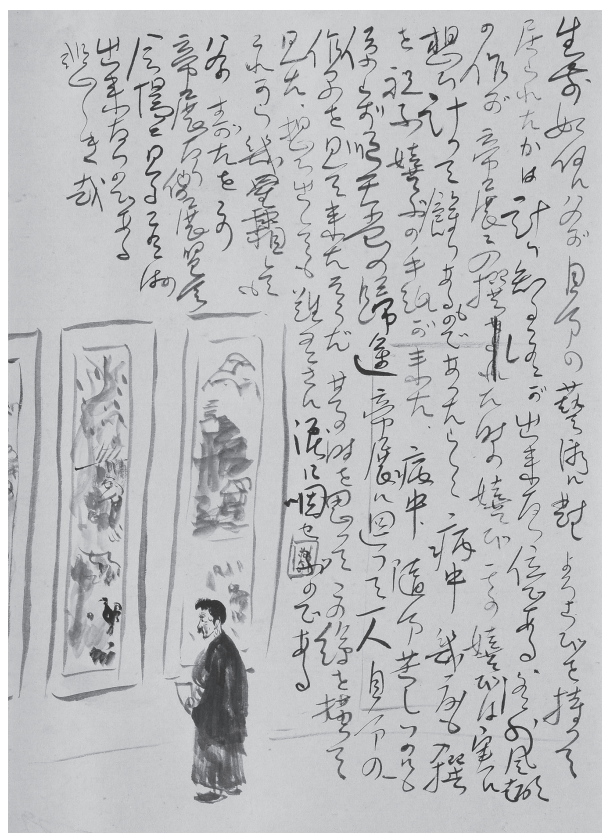
殿

津田殿

殿



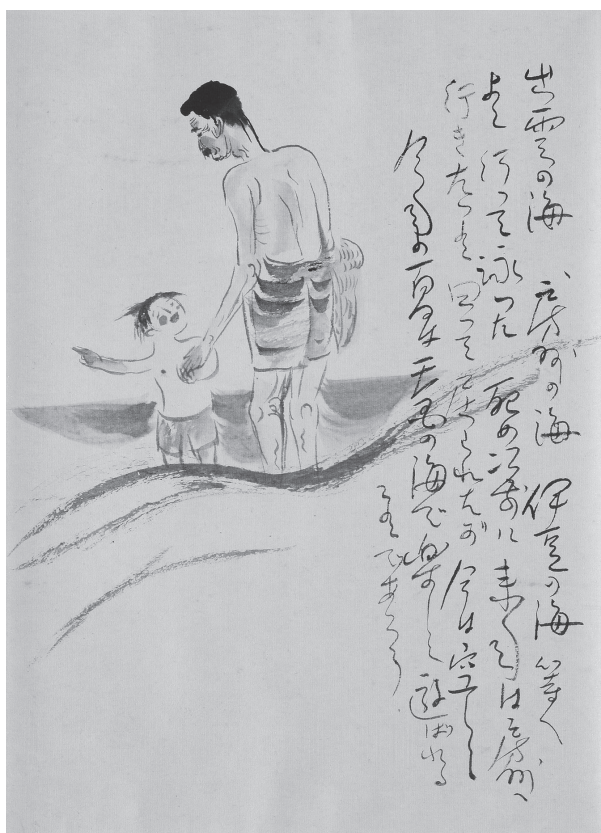
温泉も好きで自分が伊豆の土肥【49】に  
居た時も時々  
来ては  
二人して色々  
話しながら  
気長に気持よく  
楽しく  
つかったもので  
ある



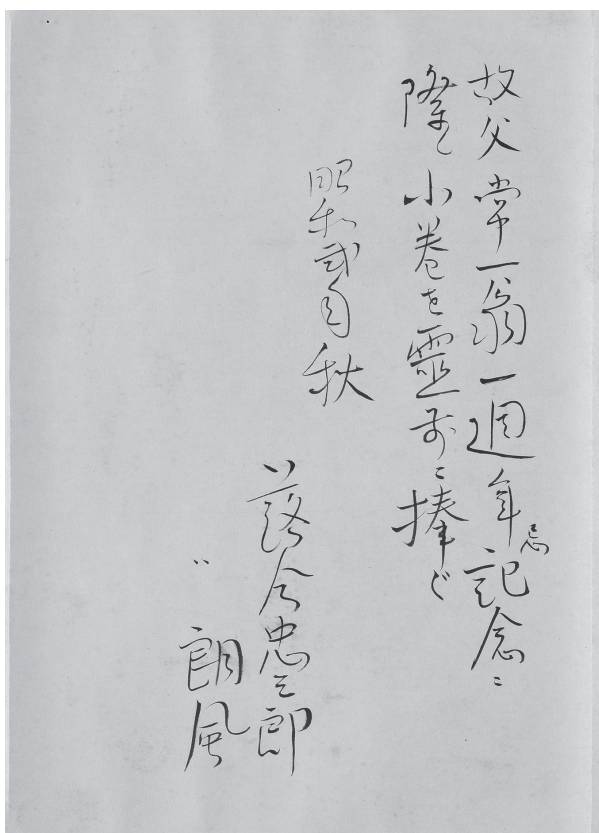
生前如何に父が自分の芸術に對しよろこびを持って  
居られたかは計り知ることが出来ない位である。浴外風趣  
の作【20】が帝展に入選された時の喜びその喜びは実に  
想ひ計つて余りあるものであつたらしく病中幾度も入選  
を祝ふ嬉ぶの手紙が来た。病中随分苦しいのにも  
係らず順天堂【51】の帰途帝展に廻つて一人自分の  
作品を見て来たそうだ其の時を思つてこの絵を描いて  
見た。想ひ出しても難有さに涙に咽せぶのである  
それから幾星霜しても  
父のすがたをこの  
帝展なり他の展覧会  
会場に見ることは  
出来ないのである  
悲しき哉



父は又非常に子供を愛した 父の友達は  
子供達であつた 海水浴に山登りに物見に  
いつも子供らの  
おじいさんで  
あつた。



出雲の海、房州の海、伊豆の海等へ  
よく行って泳いだ死の以前に来年は房州へ  
行きたいと曰つて居られたが今は空しく  
今年の夏は天国の海で楽しく遊ばれる  
ことであらう。



京都に來られた時も  
折々  
色々話の  
末  
父の手まね等  
をして  
笑ひ合ひした  
ものだ。  
懐しき  
追憶で  
ある。

故父常一翁一週年記念に  
際し小巻を霊前に捧ぐ  
昭和式年秋

落合忠三郎  
朗風

#### 四、《落合常一翁絵巻》註釈

本章では、前章で翻刻した《落合常一翁絵巻》について註釈を加える。前章の凡例で記したように、各項の先頭に記した数字は、前章【】内の数字に対応している。

##### 1. 常一翁像

父親の姿を、朗風は《父の肖像》（当館蔵）においても描いている。同作は紙本墨画の一幅であり、落款として「大正九年／師走十八日写」、「朗風子」（白文長方印）が残る。身体の左側面を写し取った構図や左眼で画面正面を見つめる常一の描写は、両作の近似性を感じさせる。大正9（1920）年の時点で形成された父親像が、本作制作時にも参照されていた可能性がある。



落合朗風《父の肖像》  
（当館蔵）

##### 2. 鉸川郡平田町宮の丁

朗風は「宮の丁」と記しているが、「宮ノ町」のこと。現在の鳥根県出雲市平田町。宇美神社付近と考えられる。ただ、朗風没後に平田町では

大規模な区画整理が行われているため、詳細な場所は既に分からなくなっている。

##### 3. 浅沼写真店

明治4（1871）年、浅沼藤吉が日本橋呉服町に写真材料店として開業した。菅保男編『浅沼商会百年史』（浅沼商会、昭和46年10月29日、10頁）参照。

##### 4. 現今の中井銀行

中井銀行神田支店は、東京市神田区表神保町二番地に「大正元年八月初めて現所に開設」（桑原萍水『神田人物誌』神田公論社、大正5年12月13日、303頁）したので、常一の煙草屋が建っていたのはこの場所と考えられる。

##### 5. 母きく

東京の洞村源兵衛の娘。ちなみに、きくの妹のてふ（「てい」と表記する文献もあり）は、東京日本橋蛸殻町において山六商店という穀物の仲介問屋を営んだ杉山魯九郎のもとに嫁いだ。朗風の追悼文を杉山てふが記すのは、この関係性による。「杉山魯九郎」（『昭和九年版日本人事名鑑』上巻、連合通信社、昭和8年12月5日、32頁）参照。

##### 6. 煙草政府専売となり廃業す

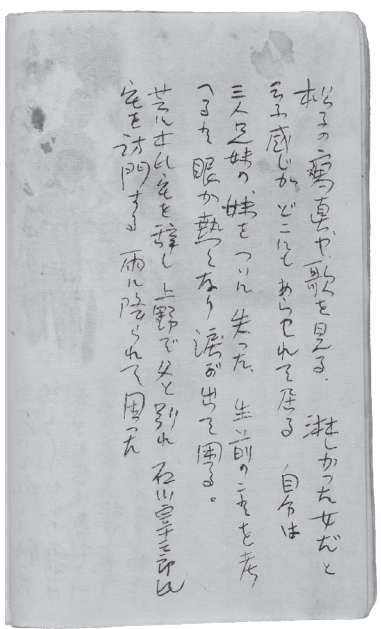
明治31（1898）年に葉煙草専売法が、明治37（1904）年に煙草専売法が制定された。きくの死去が専売法制定以後の出来事として記されているため、葉煙草専売法が施行された際に店を畳んだと考えられる。註7もあわせて参照。

##### 7. 永逝す

きくの妹の杉山てふが「故人（註・朗風）が母親に死別致しましたの

は、四歳の時で御座いました」「幼年時代を偲びて」「落合朗風追慕」明朗美術連盟、昭和12年6月2日、129頁）と記録しているため、数え年で計算するのであれば、きくが亡くなったのは明治32（1899）年と考えられる（満年齢であれば翌年）。

なお「三人の幼児を残して」と本文に記されている点をあわせて考えるのであれば、朗風は当初三人兄弟であったことが分かる。大正13（1924）年の『絵日記』（当館蔵）において朗風は、「松子」が4月13日に亡くなり、16日には「自分は三人兄妹の妹をついに失った」と記しているため、本作にも名前が登場する兄の忠三郎の他に「松子」という妹がいたと推測できる。枝野茂「落合朗風その一」（『美術グラフ』第18巻第7号、昭和44年8月15日、24頁）が「（註：朗風は）常一・きくの三男として（中略）生れて」と記して以降、その記述が踏襲されてきたものの、三人兄弟の次男という表記が正確であろう。



『絵日記』  
（当館蔵）

#### 8. 西ヶ原獣疫調査所

現在の東京都北区にあった獣疫調査所。明治43（1910）年3月に農務局獣疫調査所として設置され、大正10（1921）年4月に農務省

の独立機関化している。牧江弘孝「動物医薬品検査所（ZYAL）の（）れから」（『動薬検ニュース』No.284、平成20年10月）参照。

9. 五十余才  
常一の生年は安政3（1856）年なので、数え年で年齢を考えた場合、50代は明治38（1905）年から大正4（1915）年までとなる。註12もあわせて参照。

#### 10. 本郷区動阪町十六番地

現在の東京都文京区千駄木付近。なお、『写生帖断簡』（個人蔵）のなかには、「大正五年十月廿七日／東京市本郷区動阪町／十六番地／落合朗風」と書き残したものが現存している。山田天契『日本名画大家鑑』（日本研美会、大正10年7月30日、75頁）にも、朗風の住所は「東京市本郷区動阪一六」と表記されているため、大正5年から10年頃までは父親と同居していたと考えることができる。

#### 11. 田端

大正14（1925）年5月28日に朗風が常一と忠三郎へ送った葉書（当館蔵）は、送付先が「東京市外滝の川町字田端548」となっている。現段階の調査では、田端の住所の記載が残る最も古い書簡であり、父が兄と同居していたことも分かる。

#### 12. 七拾一才

常一の生年は安政3（1856）年であり、亡くなった大正15（1926）年時点で71歳ということは、数え年表記を本作では用いていたことが分かる。

#### 13. 三田教会

三田教会（三田美以教会）は、慶應義塾の近くに明治19（1886）年

に創設されたメソジスト派の教会。昭和21（1946）年、銀座教会及び青山教会と合同し、現在に至る。三田教会については、日本基督教団

銀座教会編『銀座教会九十年史』（銀座教会、昭和56年2月1日）参照。

#### 14. 中川邦三郎

中川邦三郎は、明治45（1912）年から大正3（1914）年、及び大正11（1922）から昭和3（1928）年まで三田教会の牧師として在籍している。『銀座教会九十年史』370頁参照。

#### 15. 市外落合火葬場

現在の東京都新宿区上落合にある落合斎場のこと。落合火葬場の歴史については、福田アジオ「都市化と葬墓制の変化」（『新宿区の民俗』（4）落合地区篇、新宿区立新宿歴史博物館、平成6年3月）を参照。

#### 16. 島根県平田町本妙寺

現在の島根県出雲市平田町に現存している日蓮宗寺院。本妙寺に残ると伝わっている落合家の墓石は、筆者の調査による限りでは現在所在不明。

#### 17. 青山墓地

青山霊園には常一だけではなく朗風の墓石も後年建てられたが、落合家の墓石は無縁墓地として既に処理されてしまっている。「美術界だより故落合朗風一周忌」（『白日』第12巻第3号、昭和13年5月15日）参照。後年では結城素明「芸文家墓所誌—東京美術家墓所誌続篇」（学風書院、昭和28年8月1日、218頁）が青山霊園に朗風の墓所があったことを報告している。

21. 今市駅

現在のJR出雲市駅。当時は出雲今市駅と呼ばれていた。

22. 二畑鉄道

明治44（1911）年、出雲今市から一畑間の軽便鉄道敷設免許を受け、翌年一畑軽便鉄道株式会社として創設。大正3（1914）年には出雲今市駅と雲州平田間を結ぶ運輸営業を開始した。

23. 直江の駅

現在の同駅。荘原駅と出雲市駅（旧出雲今市駅）の間に位置している。

24. 平田の幸の屋

現在の島根県出雲市平田町にあった旅館の名称（幸野屋<sup>こうのや</sup>）。現在は廃業。落合家だけではなく、平田出身の日本画家・小村大雲（1883～1938）とも親交があり、朗風の掛軸や大雲の衝立などを所蔵していた（大雲作品の一部は平田本陣記念館に現存）。朗風と大雲の関係性については、五味俊品『落合朗風』（求龍堂、180頁）及び『朗風と大雲展図録』（平田本陣記念館、令和6年9月20日）参照。

25. 故落合常市之墓

父親の名前表記をここでは「常市」としている。手紙や墓石などでは「市」表記を用いているため、こちらの記載が正式なものかもしれない。ただ、一章の冒頭においても記したように、題簽や共箱において「常一」表記を朗風が採用しているため、本稿では父親の名を「常一」で統一した。

26. 故大田博士

大田博士の詳細については、妻である貞枝とともに未詳。

33. 平治郎

落合朗風の本名。ただ兄が「平次郎」と記す場合もあり、「治」と「次」のどちらが正式な表記なのか未だ明らかになっていない。落合忠三郎「少年時代の思出」（『落合朗風追慕』明朗美術連盟、昭和12年6月2日、133頁）及び「画歴」（『落合朗風遺作集』芸艸堂、昭和14年4月23日）参照。

34. 飯久保貞治

三田教会の牧師を明治36（1903）年から同41（1908）年まで務めた。『銀座教会九十年史』369頁参照。

35. 松崎精一郎

松崎精一郎は『玉の声』永世号（靈廻舎、大正3年1月27日）を発行した人物であろうか。松崎は東京の瀧野川町上田端九十七番地に住んでいたため、落合家とも近隣となる。同書22頁に「松崎が訪問伝導を為す軒数は毎月三四百の多きに至れり」と記されているため、キリスト教関係者として出会った人物と思われる。なお註7に記した松子の葬儀の際、同一人物かは分からないものの、「松崎牧師」が告別式の司会を務めたことが『絵日記』（当館蔵）には記されている。

36. 吉岡誠明

註30を参照。

37. 杉山魯九郎

註5を参照。「杉山蝶」についても同註参照。

38. 中川邦三郎

註14を参照。

27. 落風さんの展覧会

大正13（1924）年10月23日より、大阪三越において開催された落合朗風の個展。「落合朗風氏は作品三十一点を去月二十三日から二十七日まで大阪三越に於て個人展覧会を開く」（「画家消息」『帝国絵画新報』第13巻第12号、大正13年12月1日）と報じられている。

28. 落合藤助

落合常一の父親を指し示していると考えられる。

29. 滝の川町聖学院

明治37（1904）年、現在の東京都北区に設置された教会。現在の滝野川教会の前身。創設時の正式名称は聖学院神学校内滝野川基督教会。秋山操『滝野川教会七五年史』（滝野川教会、昭和54年11月25日）参照。

30. 三田教会吉岡牧師

吉岡誠明は、大正3（1914）年から同10（1921）年まで三田教会の牧師を務めた。『銀座教会九十年史』370頁参照。

31. 浅賀町ホーリネス教会

「本郷ホーリネス教会 東京市本郷区浅賀町動坂通り清水良太郎」（『大正八年基督教年鑑』（日本基督教会同盟、大正9年5月22日、196頁）とあるため、現在の東京都文京区にあった教会を示していると考えられる。ちなみに、註45の土岐孝太郎は本郷ホーリネス教会にて大正7（1918）年に洗礼を受けた。粕谷常吉『房州に光を掲げた人々』（日本聖公会出版事業部、昭和48年7月15日、218頁）参照。

32. 落合忠三郎

落合朗風の兄。

39. 中嶋とよ

メソジスト派の弘前教会において、明治30（1897）年から同43（1910）年まで婦人伝道師を務めた人物ではないだろうか。飯久保貞治も弘前教会の牧師を明治33（1900）年から3年間務めているため、落合家との人間関係の面でも矛盾はない。「弘前教会一覽表」（『日本メソヂスト弘前教会五十年記念史』日本メソヂスト弘前教会、大正14年10月4日）参照。

40. 石井鉄五郎

現在の千葉県流山市において、明治35（1902）年にパンとお菓子のお店・清水屋を創業した石井鉄五郎であろうか。石井鉄五郎は、フランス人の宣教師・ゼイグルスなどの影響で受洗したが、落合家とどのように出会い、どのような関係性であったかは未詳。「最盛期の千葉県巡回伝道」（『聖母と共に』カトリック西千葉教会、昭和58年11月23日）参照。

41. 寺内用助

メソヂスト派の山梨県伝道師として名前が『大正七年基督教年鑑』（日本基督教会同盟、大正8年1月31日、244頁）などに記されているものの、同一人物かは未詳。

42. 加藤光澄

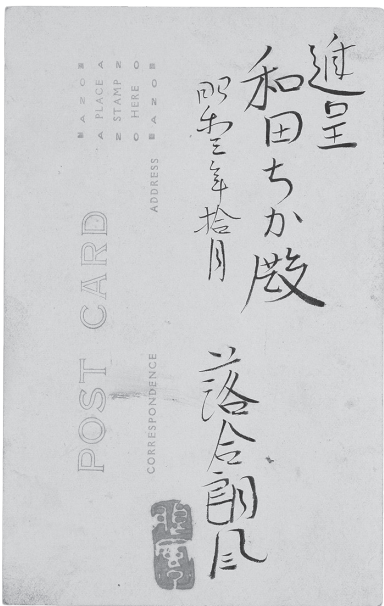
「獣疫調査所に於ては三月六日午後四時第四十九回例会を開き加藤光澄君の本邦雑誌中重要記事の紹介」（『中央獣医会雑誌』第25輯巻之3、中央獣医会、明治45年3月28日、105頁）と記されているため、西ヶ原獣疫調査所に常一が勤務していた際の関係であろうか。

#### 43 西尾寿太郎

「平田の一式飾」（『出雲新風土記』第二輯行事の巻、昭和14年12月、102頁）において、「今日に至る迄の一式飾の名手を列挙すれば、木佐字太郎（表具師）千把定造（裝飾屋）三村啓太郎（鑄掛屋）西尾寿太郎（小間物屋）等で木佐は数年前に六十余歳で没したが他は皆現存してゐる」と西尾の名前が記されている。平田町時代の知り合いと考えるのが適切ではないだろうか。

#### 44 和田ちか

久邇宮家の天井画を朗風が制作した際の絵葉書に、「進呈／和田ちか殿／昭和三年拾月 落合朗風／朗風子（白文長方印）」と朗風自ら記したものが現存（個人蔵）している。常一だけではなく、朗風とも親交のあった人物であることが分かる。ただ「和田ちか」という人物であったかは未詳。



『和田ちか宛葉書』（個人蔵）

#### 45 土岐孝太郎

明治5（1872）年8月10日、千葉県生まれ。中央大学を卒業後、『中央新聞』、『朝日新聞』において記者として活躍した。その後、

『国民新聞』の経済部に移り、同紙の論説委員となった。同社退職

後、『読売新聞』においても論説委員を務めた。本郷ホーリネス教会において洗礼を受けたという（『房州に光を掲げた人々』218頁）。註31でも記した通り、落合家は本郷ホーリネス教会に通っていた時期もあるため、その関係で出会ったのであろう。

#### 46 松本芝巖（1865～1930）

慶応元年4月15日、当時の平田町本町に生まれる。名は薫、字は子清、通称は喜次郎。塩田鏡香ていこうに学び、花鳥画や山水画を得意としたと伝わる。明治23（1890）年の第3回国勸業博覧会へは「花鳥」を出品している。出雲市平田町の法恩寺が菩提寺。

#### 47 柳沢小松

落合朗風が大正10（1921）年の日本美術院試作展に出品した『豊玉姫「海姫」』（二曲一隻屏風、当館蔵）の旧蔵者。『落合朗風遺作集』参照。なお、関東大震災で被災した三田教会の修理費用を負担した信徒のなかに、柳沢小松の名前を見つけることができる。三田教会の隣で医院を経営していたという。三田教会において落合家と出会い、若き朗風の作品も購入したと考えるのが妥当ではないだろうか。

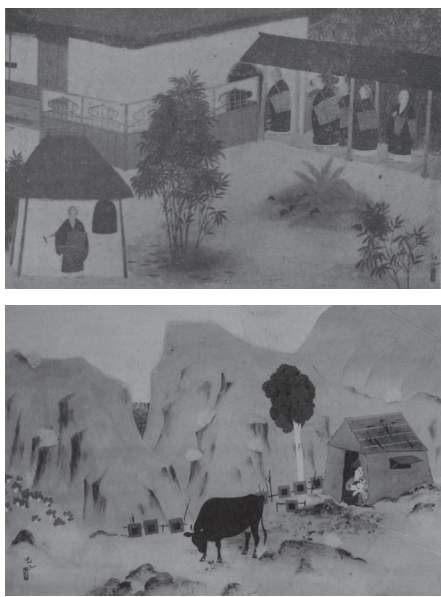
#### 『銀座教会九十年史』376頁参照。

#### 48 角定市

明治22（1889）年9月8日に生まれ、島根県平田市平田町九三三に住んでいたとの記載が『褒章受有者名鑑』（褒章受有者名鑑刊行会、昭和32年11月20日、305頁）にある。落合朗風が表紙を担当した『平田のしをり』（來間泰三郎、大正11年10月1日、48頁）にも在郷軍人分会の理事に歩兵上等兵として名を連ねている。

#### 49 伊豆の土肥

大正9（1920）年の2月に開催された日本美術院第六回試作展へ、朗風は『伊豆（僧院・海岸）』（現在所在不明）を出陳している。作品制作のために伊豆を訪れたと考えられるため、この時期のことかもしれないが、確証はない。なお、静岡県田方郡土肥村を朗風が訪れた記録は昭和9（1934）年頃のものを見つけることができるものの、大正時代に訪問した記録については未だ明らかになっていない。



落合朗風  
《伊豆（僧院・海岸）》

#### 50 洛外風趣の作

大正15（1926）年の第7回帝国美術院展覧会に入選した作品（足立美術館蔵）。京都の風景を四面で表現した作品であり、常一の眺める作品として挿図に描かれているのは、洛北と洛西を描いた右二面。

詳細は、『落合朗風』（求龍堂）の同題作解説（58頁）参照。

#### 51 順天堂

本郷区御茶の水（現東京都文京区本郷）にある医院。

#### 52 房州の海

朗風の妻の信子は千葉県安房郡千倉町（現南房総市）に生まれた。妻の実家を訪れる機会も多かったであろう、『外房風景「海辺餘光」』（大正14年頃、平田本陣記念館蔵）など房総半島の景観に着想を得た作品を朗風は制作している。そういった取材旅行にあわせて、父親の常一も一緒に千葉の海を訪れていたのかもしれない。なお妻の信子の家系については詳細を明らかにできていないが、『大衆人事録』（帝国秘密探偵社、昭和10年12月15日）の落合朗風の項目には「妻信子（明二九）千葉県和田源造姉」と記されている。

#### おわりに

これまで詳細に研究されてこなかった『落合常一翁絵巻』について、本稿では註釈を付しつつ、その制作経緯や伝来についても検討を加えた。以上の内容をふまえ、今後の朗風研究に資する観点として次の三点を指摘したい。

一つは、落合家とキリスト教の関係性である。落合朗風がキリスト教徒であったことは先行研究のなかで指摘されてきたものの、常一が三田教会の歴代の牧師と密接な関係性を築いていたこと（註釈13など参照）は今まで知られていなかった。大正8（1919）年の再興第6回日本美術院展覧会に出品された『エバ』（山種美術館蔵）や大正10（1921）年に制作された『キリスト誕生』（個人蔵）といった作品群が、父親の篤い信仰心の影響下で誕生した可能性は極めて高い。朗風の宗教観形成を検討するうえで、本作は重要な資料的意義を有している。

二つ目は、朗風と東京都田端付近を結びつける役割としての常一  
の存在である。田端と朗風の関係については、『落合朗風』（求龍堂）  
における《涅槃》（東覚寺蔵）作品解説のなかで若干触れたものの、そ  
れを裏付ける資料などは見つかっていなかった。ただ本稿での註釈を  
行うことによって、常一が朗風作品の受容に一定の役割を果たしてい  
た実態を、本作の記述から確認することができた。（註釈11及び19参  
照）。東京における今後の調査範囲を検討するうえで、本作は貴重な  
情報を含んでいる。

最後に挙げられるのが、落合家と島根県（特に平田町）の関わりで  
ある。常一が若い頃に上京してしまったため、平田町住人と落合家の  
関係性はこれまで明確になっていなかった。本作には平田町関係者の  
名前が数名挙げられているが、日本画家である松本芝巖の名が記され  
ている一方（註釈46参照）、大正4（1915）年頃に朗風が画法を学  
んだ小村大雲の名前を本作のなかに見出すことができない点は興味深  
い。先行研究では縁故関係を理由に朗風と大雲を紐づけていたが、少  
なくとも常一と大雲及び小村家の間に密接な関係性があつたとは考え  
にくい。平田町における落合家と住人の関係性については、今後慎重な  
再検討が求められる。

このように、『落合常一翁絵巻』に内包された情報を精査すること  
は、落合朗風研究の基礎的枠組みを構築するうえで有効である。現時  
点では詳らかにできなかった人物名も残っているが、朗風の関係資料  
が今後発見されることで明らかになってくる部分も多いに違いない。ま  
た『落合常一翁絵巻』は、朗風の軽妙な画風が誕生するひとつの転換  
点となった作品でもある。本文でも言及した『絵日記』などを合わせて、

だ、その際は新篁堂特注の整理紙が外箱に貼られるため、本作は別の表具師が  
手掛けたのであろう。

6. 勝部大逸が記した日記は、大正時代のものではないものの、昭和6  
（1931）年に記された一冊を見つげることができている（個人蔵）。
7. 俳句と朗風の関係性については、『落合朗風』（求龍堂、69頁）参照。
8. 落合草風については、『落合草風遺作集』（落合武久、平成14年12月16日）  
参照。
9. 落合黎明時代に朗風や明朗美術連盟職員と交わした書簡を当館が所蔵して  
いる。
10. 『落合朗風遺作目録』については、五味俊品『落合朗風』（求龍堂、174  
頁）参照。
11. 「落合朗風遺作頒布会」と扉に記したパンフレットが現存（個人蔵）して  
いる。頒布された作品とスケッチが列記され、明朗美術創立記念試作展に出品  
された《半裸》（現足立美術館蔵）や《茶郷二題》（現当館蔵）もこのタイ  
ミングで売りにだされたことが分かる。なお、それぞれの売値は《半裸》が  
500円、《茶郷二題》が2000円であった。

（島根県立美術館 主任学芸員）

朗風の多様な画風変遷のなかでどのような位置を占めるのか今後考え  
ていく必要がある。本稿で整理した落合家の家族関係、宗教的背景、そ  
して交友関係を踏まえ、次号以降では個別作品の分析を通じて朗風の  
制作意識を具体的に検討していきたい。

#### 註

- 1 大正時代の落合朗風に関して検討を加えた先行研究としては以下を挙げる  
ことができる。枝野茂「落合朗風・その一」（『美術グラフ』第18巻第7号、昭  
和44年8月15日）、田中日佐夫「近代美術史の発掘3 落合朗風について」（『三  
彩』348号、昭和51年8月）、『落合朗風魂の叫び』（日本放送出版協会、  
平成4年7月25日）、『落合朗風生誕百年展』（平田市立日本陣記念館図録刊  
行会、平成7年11月）、五味俊品『落合朗風』（求龍堂、令和6年9月20日）。
- 2 落合朗風没後における、彼を中心とした特別企画展は管見の限り以下の通り。  
・落合朗風遺作展覧会「昭和14（1939）年4月、東京府美術館  
・「故落合朗風画伯遺作展」昭和31（1956）年10月、松江市公会堂  
・「異色作家シリーズ 落合朗風展」昭和34（1959）年2月、渋谷東横7階  
・「落合朗風遺作展」昭和44（1969）年5月、島根県立博物館  
・「落合朗風展」平成4（1992）年3月、平田市立日本陣記念館  
・「落合朗風生誕百年展」平成7（1995）年11月、平田市立日本陣記念館  
・「落合朗風展 明朗美術連盟と目指した世界」令和6（2024）年9月、島  
根県立美術館

- ・「朗風と大雲展」令和6（2024）年9月、平田本陣記念館  
現存するそれぞれの出品目録を確認する限り、『落合常一翁絵巻』を初めて展  
示したのは、昭和44年の「落合朗風遺作展」と考えられる。なお「落合朗風遺作  
展」の出品目録では「絵巻」と記されている。
- 3 『落合朗風魂の叫び』（日本放送出版協会、平成4年7月25日）所収。ただ、  
大岡信は作品現物を実見した訳ではなく、当時の平田市立日本陣記念館より  
提供された画像資料を用いて本文を記している。
- 4 五味俊品「落合朗風研究 明朗美術連盟設立とその出品作品について」  
（『島根県立美術館研究紀要』第4号、令和5年3月31日）参照。
- 5 朗風の表具は、親交のあった京都の高瀬新篁堂が手掛ける場合が多い。た

島根県立美術館研究紀要 第7号

令和8年3月31日

編集・発行 島根県立美術館

© Shimane Art Museum 2026